

## 【論 説】

### 価値観研究のフロンティア

#### ——Circumplex モデルから Radex モデルへ——

真 鍋 一 史

#### 1. 価値観研究の系譜

価値観 (values) というテーマに関しては、これまで膨大な数の研究がなされてきている。筆者の「価値観研究」は、このような先行研究に関する文献研究からスタートした。そして、そのような文献研究の視座を「研究の発展」というところに置いた。筆者は、それを (1) 「科学」という視座と、(2) 「社会」という視座、に区別した (真鍋 2013, 1998)。

##### (1) 科学という視座

価値観研究の系譜を、この研究領域の「科学化」という視座から見ていくならば、それは価値観についての「概念化 (conceptualization)」から「操作化 (operationalization)」への知的営為の発展過程として捉えることができる。

価値観研究の、いわば「黎明期」ともいうべき 1940 年代から 1960 年代にかけて、価値観という用語は、人びとの一連の心的過程を表す用語、例えば「欲求・要求 (need)」「動機 (motive)」「態度 (attitude)」「意見 (opinion)」「行動 (behavior)」などの用語とともに、概念化が進められた。その結果、価値観は「欲求・要求」や「動機」に深く根をおろしながら、「態度」を方向づけ、それらが「意見」や「行動」に結実していく、として位置づけられた。ここで、とくに「態度測定」「態度構造」「態度変容」の研究の発展には目をみはるものがあった。

このような研究の蓄積を踏まえて、「ガットマン・スケール」で名を馳せ

た Louis Guttman とその共同研究者による「ファセット・セオリー (Facet Theory)」の線上での価値観研究が登場し、「価値観」は「態度」の下位概念として理論的・実証的に位置づけられることになった (真鍋 2015)。社会科学の科学化のためには、概念の操作化とその測定にもとづく実証的な研究の蓄積が不可欠である。こうして、ここでは、この研究の段階を「発展期」と呼ぶ。そして、Guttman らの研究を踏まえて、人びとの価値観を「環状連続体」の形状で捉える Shalom Schwartz とその共同研究者の成果が出現することになる。

## (2) 社会という視座

その後、価値観研究には、新しい研究法が登場する。それは、「国際比較」あるいは「文化比較」という研究法である。G. Hofstede による価値観の諸次元の抽出をめざす研究はその嚆矢であった。そのような方法論的な関心をさらに発展させた国際共同研究として、Loek Halman を中心とする「ヨーロッパ価値観研究 (European Values Study: EVS)」と Ronald Inglehart を中心とする「世界価値観調査 (World Value Survey: WVS)」があげられる。これら二つの調査プロジェクトは、人びとの価値観というところに焦点を合わせた「現代社会論」あるいは「ポスト近代化論」の試みであったという点で、それまでの「価値観研究」とは大きく異なる。それまでの諸研究は、より「心理学・社会心理学」的な視座に立つものであったのに対して、これらの諸研究は、より「社会学・政治学」的な視座に立つものであったということもできる。こうして、価値観研究においても、「社会」という視座が確立してくることになった。

## 2. 筆者の問題関心

価値観というテーマについては、さまざまな個別科学——心理学、社会心理学、社会学、政治学など——からのアプローチが可能である。筆者の問題関心は、上述の価値観をめぐる研究の系譜をたどる形で、(1) の視座から出発しながらも、やがて (2) の視座へと移行していった。社会科学においては、このような問題関心のあり方が研究の重要なポイントになる。いうまでもなく、問

題関心のあり方によって、捉えられる現実（reality）の姿がまったく異なったものになるからである。

では、本稿での筆者の問題関心がどのようなものであるかということ、それは「社会学的」なものであるということが出来る。そして、そのような筆者の「社会学的イマジネーション」からするならば、グローバル化の進展する現代社会における最も重要な問題として、つぎの二つがあげられる。

(1) 人びとの価値観の「共通化（収斂：convergence）」と「多様化（拡散：divergence）」の方向：現代のようなグローバル化の進展する時代にあっては、一方で文字どおりグローバルに共通になっていく価値観の方向（共通化・収斂の方向）と、他方でそれにもかかわらず、やはりそれぞれの国・地域・人間集合体ごとに継続していく価値観の方向（多様化・拡散の方向）とが、お互いにせめぎ合うことになってきたということである。

(2) 人びとの価値観の「一般的・抽象的な側面」と「個別的・具体的な側面」の「乖離（discrepancy）」の方向：人びとの価値観の「乖離現象」は、これまでさまざまな社会において、その存在が確認されてきた。ここで重要なポイントは、グローバル化の進展にともなって、一方でこのような「乖離」の方向がより鮮明になってくるとともに、他方でそれにもかかわらず、そのような「乖離」の程度（レベル）は、それぞれの国・地域・人間集合体ごとに異なるものであるということである。

### 3. 問題関心の実証的な根拠

以上のような問題関心は、筆者の「社会学的イマジネーション」から導かれたものであるにとどまらず、じつは筆者による国際比較調査データの分析結果という実証的な根拠を持つものでもある。以下においては、それぞれの問題関心ごとに、実証的な根拠を示していきたい。

(1) 人びとの価値観の「共通化」と「多様化」の方向

この価値観の方向についての議論は、R. Inglehart の「世界価値観調査」にもとづく「文化地図 (cultural map)」にまとめられた知見とその解釈が出発点となる。Inglehart は、世界の国ぐににおける人びとの価値観を、「伝統的価値観－世俗的・合理的価値観」の次元と「生存価値観－自己表現価値観」の次元という二つの次元で捉え、これら二つの次元を座標軸の縦軸と横軸に置き、そこに調査対象国をプロットしていくことによって、図 1 を作成し、それを「文化地図」と呼んだ (Inglehart 1997, Inglehart and Welzel 2005)。

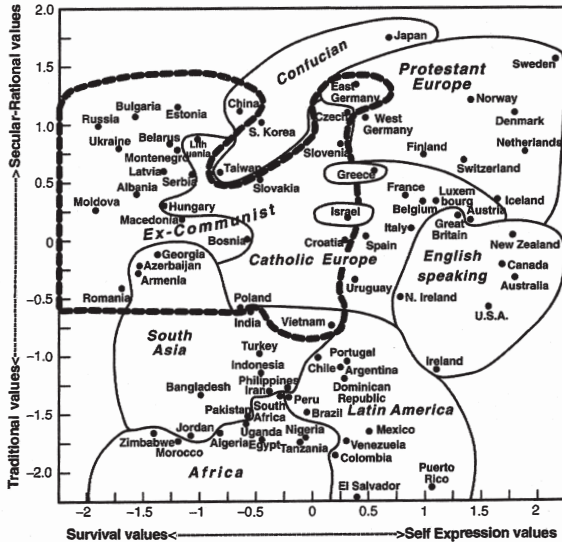


図 1 Inglehart の「世界の文化地図」

ここで、各国をそれぞれの価値観の得点にもとづいて、二つの次元からなる空間に位置つけた結果は、実証的な「知見」であるのに対して、そのようにして位置づけられた日本、中国、韓国、台湾を一つのグループとしてまとめ、そのグループを「儒教文化 (Confucian Culture)」を共有する国ぐにであるとした性格づけは、そのような「知見」の「解釈」である。そして、そのような「解

積」をめぐって、さまざまな問題が提起されることになる。それは、例えば (i) 空間での距離という点からするならば、台湾はスロベニアやリトアニアに近いにもかかわらず、日本、中国、韓国とともに一つのグループとしてまとめられているのはなぜか、(ii) これらの国ぐにに共通する文化的価値は、はたして「儒教的」と性格づけられるものであろうか、(iii) ここでは、アジア内部における価値観の共通性に焦点が当てられているが、ではそこには「差異性」というものは見られないのであろうか、などの問題である。本稿では、(ii) と (iii) の問題を取りあげる。そのために、筆者が国際比較調査データの「二次分析 (secondary analysis)」の手法で東アジアの国ぐにの「伝統的な価値観」の再検討を試みた結果を紹介する (真鍋 2012)。

このデータ分析については、つぎの点を記しておきたい。

①データ分析のために利用する国際比較調査：「アジアバロメーター (AB, 2003)」「アジア・バロメーター (AnB, 2001 - 2003)」「東アジア価値観国際比較調査 (EAVS, 2002 - 2004)」「世界価値観調査 (WVS, 2000—2002)」「国際社会調査プログラム (ISSP, 1998)」

②データ分析にとりあげた国：日本、中国、台湾、韓国、シンガポール

③伝統的な価値観の諸項目：

「名声」(「多くの人びとから尊敬される人になる」など)

「人間関係」(「愛情と慈悲のある人になる」など)

「保守意識」(「女性の上司のもとで仕事をする男性は面目を失う」など)

「調和」(「他人とうまくやっていくためにはその人に合わせる事が大切である」など)

「先祖を敬う」(「われわれは先祖を敬わなければならない」など)

「孝行」(「人生の目標の一つは両親を誇りに思ことである」など)

では、このような国際比較調査のデータ分析によって何がわかったかという  
と、それは表 1 に示したとおりである。この表は、質問諸項目ごとの、各国別

の単純集計表からの結果の読み取りを、概括的にまとめたものである。

表1 東アジアの国ぐにの「伝統的な価値観」 (%の値)

|       | 低     | 中       | 高         |
|-------|-------|---------|-----------|
| 名声    | 日本・中国 | 韓国      |           |
| 人間関係  | 中国    | 韓国      | 日本        |
| 保守意識  | 日本・台湾 | 韓国      | 中国        |
| 調和    |       | 韓国・台湾   | 日本・中国     |
| 先祖を敬う | 日本・韓国 | シンガポール・ | 台湾        |
| 孝行    | 日本・中国 |         | 韓国・シンガポール |

この結果からするならば、「伝統的な価値観」に関しては、それぞれの項目ごとに、各国間にかかなりの差異が見られることがわかる。例えば、日本は「名声」「保守意識」「先祖を敬う」「孝行」では低い位置にとどまるが、「人間関係」「調和」では高い位置にある。中国は、「名声」「人間関係」「孝行」では低く、「保守意識」「調和」では高い。韓国は、「名声」「人間関係」「保守意識」「調和」では中位であるが、「先祖を敬う」では低位、「孝行」では高位にある。台湾は、「保守意識」は低位、「調和」は中位、「先祖を敬う」は高位となっている。こうして、東アジアの国ぐににおいて、「共通のアジア的価値観」というものを見出すことは困難である。つまり、東アジア内部における価値観の差異性は大きいことがわかる。

さて、以上の Inglehart の「文化地図」に示された結果と、筆者による国際比較調査のデータ分析の結果を対照させることをとおして、同じく「価値観」というテーマにアプローチしながらも、そこで取りあげられる具体的な質問項目の内容によって、結果は大きく違ったものとなることが明らかとなる。それは、繰り返しなが、前者、つまり Inglehart の「世界価値観調査」の結果におけるアジアの国ぐににおける価値観の「共通性」の抽出と、後者、つまり筆者による「データ分析」の結果における価値観の「差異性」の確認、というこ

とである。このように、価値観の「共通性」に焦点を合わせるか、それとも、その「差異性」に焦点を合わせるかは、それが「どちらかにしなければならない」という問題ではなく、それぞれの研究の「理論的な目標がどこにあるか」によって決まってくる問題のはずである。いずれの側面に焦点を合わせた研究も、それぞれ研究する価値のあるテーマであり、それは決して二者択一の問題ではない。さらに、このような価値観の「共通性」と「差異性」という問題を、一つの研究プロジェクトにおいて同時に扱うというアイデアも、同じように興味深い研究の方向性を示唆するものといわなければならない。いうまでもなく、それこそが現代社会における価値観のリアリティを反映したものであると考えるからにほかならない。

(2) 人びとの価値観の「一般的・抽象的な側面」と「個別的・具体的な側面」の乖離の方向

この点については、筆者による「国際比較調査プログラム (ISSP, 2004)」のデータ分析の結果 (Manabe 2002) をあげておきたい。

このデータ分析では、国際比較の視点から、各国の人びとの「男女の役割 (gender role)」についての「一般的・抽象的な態度」と「個別的・具体的な行動」を捉える質問諸項目を取りあげた。そして、そのような国際比較の方法としては、それぞれの質問項目に対する回答者の % のランキングを示すという方法を採用した。結果は、図 2～5 のとおりである。

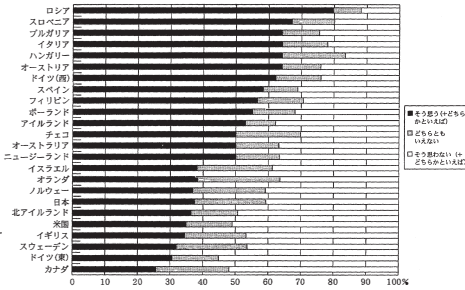


図2 「母親が毎日勤めに出ていると（フルタイムの仕事していると）家庭生活は損なわれるものだ」という質問項目に対する賛否の回答

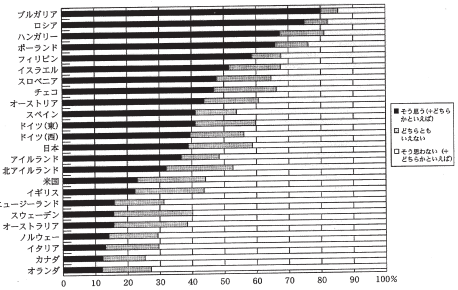


図3 「男性が家で子供の世話をし、女性が外で働くというのはよくない」という質問項目に対する賛否の回答

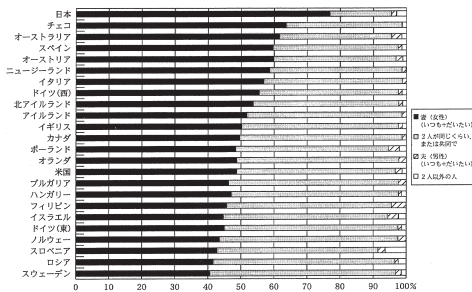


図4 「病気の家族の世話はだれがするか」という質問項目に対する回答

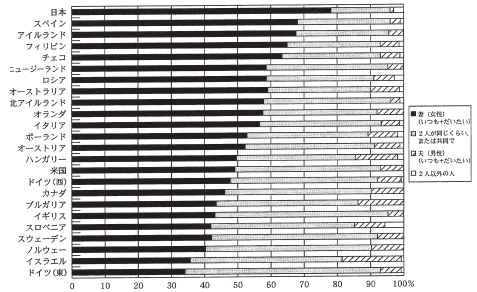


図5 「食料や日用品の買い物はだれがするか」という質問項目に対する回答

これらの結果からするならば、それぞれの質問項目ごとのランキングという点からして、日本はきわめて「乖離」の大きな（あるいは「非一貫性」の高い）国として性格づけることができる。それは、例えばスウェーデンとくらべるならば明らかとなる。

まず、図2の質問項目は「女性が毎日勤めに出ていると、家庭生活は損なわれるものだ」、図3のそれは「男性が家で子供の世話をし、女性が外で働くというのはよくない」というもので、両者はいずれも「男女の役割」をめぐる「一

般的・抽象的な態度」についての質問項目であるのに対して、図4と図5は、それぞれの家庭で『病気の家族の世話』『食料や日用品の買い物』といった家事をだれがしているか」という「個別的・具体的な行動」についての質問項目である。初めの二つの項目についての「肯定的な回答の%」の日本のランキングは「下位」あるいは「中位」といったところにある。ところが、後の二つの項目については、『いつも』あるいは『だいたい』女性がしている」という回答の%のランキングでは、日本は「上位」、それもトップに位置している。

このような日本の傾向に対して、ではスウェーデンではどうかというと、だいたいにおいて初めの2項目では「下位」にあるが、後の2項目でも「下位」に位置している。

以上から、「男女の役割」というテーマをめぐっては、いずれの国においても、人びとの「一般的・抽象的な態度」と「個別的・具体的な行動」との間には「乖離（あるいは非一貫性）」と呼ばれる心的傾向が存在することがわかるが、それが「日本」で相対的に大きく、「スウェーデン」で相対的に小さいということも読み取れるのである。

#### 4. 実証的なアプローチ

以上においては、グローバル化の進展する現代社会における価値観についての二つの重要な問題の所在を指摘するとともに、そのような指摘が単に筆者の「社会学的イマジネーション」にもとづくだけでなく、それを支持する実証的な根拠を持つものであることを明らかにしてきた。こうして、本稿における「研究の問題関心」については、いわゆる「主観の客観化」が果たされたといえる。このようなプロセスを経て、筆者の「問題関心」は、「リサーチ・クエスション」に作りあげられるのである。繰り返しになるが、それは、「グローバル化の進展する現代社会にあって、人びとの価値観については、一方で『共通化』と『多様化』の方向が、そして他方で、その『一般的・抽象的な側面』と『個別的・具体的な側面』の『乖離』の方向が、同時に顕現化してくる」というものである。

では、このような「リサーチ・クエスチョン」に対して、どのように実証的にアプローチしていくかが、つぎに問われることになる。このような「問い」に答えるために、ここでは Schwartz の「価値観モデル」から出発する。なお、Schwartz の「価値観モデル」については、以下の文献を手がかりとした。

Schwartz, Shalom H. and Bilsky, Wolfgang. (1987). Toward A Universal Psychological Structure of Human Values. *Journal of Personality and Social Psychology*. 53 (3).

Schwartz, Shalom H. (1992). Universals in the Content and Structure of Values: Theory and Empirical Tests in 20 Countries. In M. Zanna (ed.). *Advance in Experimental Social Psychology*. 25. Academic Press.

Schwartz, Shalom H. et al. (2012). Refining the Theory of Basic Individual Values. *Journal of Personality and Social Psychology*. 103 (4).

以上のような文献が出発点となって、現在、Schwartz の価値観研究が、心理学や社会学を中心に、広く「比較文化論」「パーソナリティ研究」「発達心理学」の領域において、世界のアカデミック・コミュニティで最も注目される研究の一つとなっている。それは、この研究領域の学術論文におけるその引用頻度の高さという点に如実に表れている。

Schwartz の価値観研究が注目を集めている証左のもう一つは、つぎの点に見られる。ヨーロッパでは、とくに 1980 年代以降、さまざまな社会調査が実施されることになり、そのような知的営為の促進・交流・統合の諸活動の組織化をめざして、2005 年、European Survey Research Association (ESRA) が設立された。そこで、この学会の研究大会でオーガナイズされるさまざまなセッションのテーマを見ていくならば、この領域における研究動向を体系的に捉えることができる。そして、このようなセッションにおいて、設立当初から継続して取りあげられるとともに、その時間数も多かったというものの一つ

が「価値観をめぐるテーマ」であり、とくに「Basic Human Values」という特別の名称を掲げたセッションである。ここで、「特別の」という表現を用いたが、それは Schwartz が、価値観というテーマについての実証的研究において、まさにこの「Basic Human Values」というところに焦点を合わせてきたからにほかならない。つまり、このセッションは、Schwartz の価値観研究を「レファレンス・スタディ (reference study)」とし、その線上での研究の展開を射程においてオーガナイズされてきたといえるのである。

このように、Schwartz の価値観研究は、現在、社会科学の領域で、広く世界の研究者の関心を集めている。日本でもその理論と方法は、さまざまな形——個別研究論文での引用、文化測定の研究事例、辞典・事典での解説などのさまざまな形——で紹介されてきている。

では、その内容がどのようなものであるかという、それは、Schwartz が人びとの価値観を「環状連続体 (a circular continuum)」という形状で描き出したという点が中心となっている。そのような環状連続体にあって、それぞれ隣接している領域 (regions : 「扇形」あるいは「くさび形」の部分) に位置する価値観は、相互交換的な関係にあり、両者は類似の意味を持っている。そして、その環状連続体における反対側の領域に位置する価値観は、それとは対立する意味を持っている。これが、Schwartz (1992) の価値観の基本的な構造モデルである。

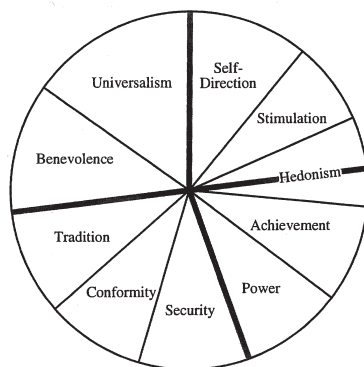


図 6 Schwartz (1992) の価値観モデル

では、以上のような Schwartz の価値観についての環状連続体モデルは、どのように実証的に確認されるであろうか。Schwartz が利用した技法は、Guttman によって開発された「最小空間分析 (Smallest Space Analysis : SSA)」である。しかし、Schwartz が利用したのは、そのような「技法」だけではなかった。じつは、Schwartz が環状連続体と呼んだ価値観の構造モデルそのものが、Guttman の「ファセット・アプローチ」に由来するものであった。

ところが、これまでの Schwartz の価値観研究の紹介やその精査を目的とした論文においては、このようないわば「社会科学の領域における知的遺産の継承」ともいうべき点については、まったく論じられていない。これは、きわめて残念なことであるといわなければならない。なぜならば、筆者の観点からするならば、Schwartz の価値観研究を Guttman の「ファセット・アプローチ」からの知的遺産の継承と捉えることで、その新しい開発と展開の可能性が示唆されることになるからにほかならない。

そこで、つぎに、Schwartz の「価値観の環状連続体モデル」が、Guttman の「ファセット・アプローチ」から継承されたものであることを、具体的にあとづけていきたい。

## 5. Guttman の「ファセット・アプローチ」の方法論的な継承

「ファセット・アプローチ」は、Guttman によって考案された独自の社会測定のアイディアであり、実証科学のこの領域における一つの到達点をしめす提案であった。それは、単なる「調査技法論」であることを越えて、独自の「科学方法論」の立場を宣言するものであった。「ファセット・アプローチ」は、「ファセット・デザイン」「ファセット・アナリシス」「ファセット・セオリー」の三領域のいわば三位一体の「知の体系」ともいうべきものである。その全体像については、筆者による別の文献を参照されたい (真鍋 2016)。

ここでは、Schwartz の「価値観モデル」と関連する部分についてのみ解説しておきたい。それは、「ファセット・セオリー」を構成する三つの法則のなかで、「第二の法則」と呼ばれるものであり、つぎのように説明される。

「第一の法則」が、質問諸項目間の関係（Pearson の「相関係数」や Guttman の「弱単調性係数」）がすべてプラスになるというその関係の「（プラス＝マイナスの）符号（sign）」に関する法則であるのに対して、「第二の法則」は、「その関係の「（大小の）大きさ（size）」に関する法則である。この法則が「領域の法則（Regional Law）」「空間の法則（Space Law）」「構造の法則（Structural Law）」と呼ばれるのは、「最小空間分析——相関行列に示された  $n$  個の項目間の関係を  $m$  次元（ $m < n$ ）の空間における  $n$  個の点の距離の大小によって示す方法であり、相関が高くなるほど距離は小さくなり、逆に相関が低くなるほど距離は大きくなる——」の描き出す幾何学的形状（configuration）によって、それら諸項目間の関係の構造が視覚的に空間の領域（region）として捉えられるからである。Guttman は、多くの大規模な質問紙調査のデータを用いて、さまざまな Regional Laws を構築してきたが、それらはすべてつぎの点から派生してきたものである。質問諸項目の内容（domain）についてのファセットの諸要素（element）は、それと同数の regions に分割される SSA の空間に対応する。ファセット（の諸要素）が空間の分割において果たす役割には三つの種類がある。ファセットがランク・オーダー（rank order: 賛－否、好－嫌、高－低、大－小などの一次元的な順序）を持たないものである場合は polar、ファセットがランク・オーダーを持つものである場合は modular か axial というのがそれである。前者に対応する理論は Circumplex、後者に対応する理論は Simplex と呼ばれる。こうして、このファセットの三種類の役割が組み合わされて、交差

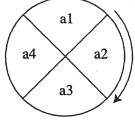
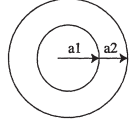
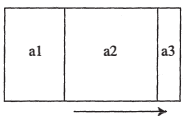
| ファセットの役割 | → 空間の分割                             |                                                                                     |
|----------|-------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Polar    | 共通の原点からの区分線が円をいくつかのくさび形（V 字型）に分割する。 |   |
| Modular  | 共通の原点のまわりにいくつかの同心円を描いて空間を分割する。      |  |
| Axial    | 矩形をいくつかの小さな矩形にスライスするように分割する。        |  |

図 7 Guttman による SSA マップの空間分割の種類とその名称

する分割線が cylinder（円筒形）、cone（円錐形）、sphere（球形）、cube（立方体）のような幾何学的な形状を描くことになる。それぞれの形状に対応する理論は Cylindrex、Conex、Spherex、Multiplex と呼ばれる。また modular と polar が組み合わされた形状に対応する理論は Radex と呼ばれる。

さて、Schwartz（1992）の「価値観モデル」では、価値観の諸項目が、原点から出る 10 本の放射線によって、10 の扇形（あるいはくさび形）の諸領域に布置（plot）されており——Schwartz et al.（2012）では、それら価値観のいくつかがさらに細分化され、19 の扇形（あるいはくさび形）の諸領域が構成されることになるが、その基本的な構造モデルの考え方は同じである——、このような形状を Schwartz は“circular continuum”——筆者はそれを「環状連続体」と訳出した——と呼んだ。しかし、上述の Guttman の「第二の法則」の解説からするならば、Schwartz の 10 の「価値観」の諸項目は「ランク・オーダー」を持たない変数——Guttman の用語でいえば「ファセット」——であって、それは SSA マップにおいて polar の役割を果たすものであり、そのような理論が Circumplex と呼ばれるものであることがわかる。つまり、Schwartz が“circular continuum”と名づけたものは、Guttman の“Circumplex”の「いいかえ（rephrase）」であることは明らかである。

以上のような「知的探索」を踏まえて、筆者は、Schwartz の「価値観モデル」を、そのデータ分析の「技法」と、モデル構築の「アイディア」の両面において、Guttman の「ファセット・アプローチ」の知的遺産を継承したものとして位置づけるのである。

## 6. Schwartz モデルの修正の提案

本稿では、「価値観研究」の系譜を踏まえた上で、筆者の「社会学的イマジネーション」にもとづいて、「価値観」というテーマをめぐる「社会学的なりサーチ・クエスチョン」を提示し、そのような「リサーチ・クエスチョン」にアプローチする方法を探るところから、Guttman の「ファセット・アプローチ」を方法論的に継承する Schwartz の「価値観モデル」へと到った。それは、いわ

ば「Schwartz へ」ともいうべき視座であった。そして、まさにここから、「Schwartz から」ともいうべき視座の転換が始まることになる。そして、そのような視座の転換は、Guttman の「ファセット・アプローチ」を媒介することで可能となるのである。

確かに、Schwartz の「価値観モデル」は、筆者の「社会学的イマジネーション」によって導かれた「リサーチ・クエスチョン」に対して、それに実証的にアプローチするためのきわめて有効なアイデアを提供するものといわなければならない。繰り返しになるが、ここでのリサーチ・クエスチョンは、「グローバル化の進展する現代社会にあって、人びとの価値観については、一方で、『共通化』と『多様化』の方向が、そして他方で、その『一般的・抽象的な側面』と『個別的・具体的な側面』の『乖離』の方向が、同時に顕現化してくる」というものである。そして、このようなリサーチ・クエスチョンは、人びとの価値観という研究対象について、何らかの「構造モデル」を準備することで、実証的に捉えることが可能となる。このような意味において、Schwartz の「価値観モデル」は有効な出発点となる。しかし、それは「出発点」であっても、「到着点」ではない。なぜならば、ここでの「リサーチ・クエスチョン」からするならば、「Schwartz モデル」にはいくつかの重要な問題点が指摘できるからである。以下においては、そのような問題点と、それに対する筆者の解決策の提案を示していきたい。

(1) Schwartz の問題関心は、人びとの価値観の「差異性」よりもむしろ「共通性」にあった。そのため、人びとの価値観の実証的な研究において「Basic Human Values」というところに焦点を合わせた——いうまでもなく、「Basic」の対立概念は「Specific」であり、「Human（人間一般）」の対立概念は「時間的・空間的に存在する具体的な国・地域・集合体の特定の人びと（Population）」である。

ところが、筆者の問題関心は、このような「共通性」とともに、その「差異性」にもある。具体的にいうならば、人びとはどのような価値観の側面については「共通性」を示し、どのような価値観の側面については「差異性」を示す

であろうかという問いである。そして、そこから、以下のような、より具体的な「仮説」が導かれることになる。それは「グローバル化の進展する現代社会にあって、人びとは価値観の『一般的・抽象的な側面』ではしだいに『共通性』を示すようになるものの、その『個別的・具体的な側面』では相変わらず——あるいは、それに逆らう形で——『差異性』を示すのではなかろうか」というものである。

こうして、筆者の問題関心と、そこから導きだされる独自の「仮説」の実証的な検証作業のためには、Schwartz の「価値観モデルとその質問諸項目」に根本的な「修正」を加える必要が出てくる。

それは、Schwartz の「Basic Human Values」のモデルに、「Domain Specific Values」の次元を加えるという修正の試みであり、そのような「修正モデル」にもとづいて、Schwartz の従来「一般的・抽象的な質問諸項目」のそれぞれに、それと対応する「個別的・具体的な質問諸項目」を加えていくという修正の試みである。

(2) Schwartz (1992) の「価値観モデル」では、一つの円が、原点からでる 10 本の放射線によって 10 の扇形(あるいはくさび形)に分割される形状となっていた。ところが、Schwartz et al. (2012) の「価値観モデル」では、その円の外側にもう一つの同心円が描き加えられ、そこに「一般性・抽象性」の高い価値観の内容が表示されることになった。



図 8 Schwartz et al. (2012) の価値観モデル

このような「モデル構築」の視座の転換は、そこで採用される「データ分析」の統計的技法と切っても切れない関係にある。筆者の仮説からするならば、Schwartz モデル（1992）は、国際ファセット・セオリー学会（International Facet Theory Association）のメンバーの一人である Wolfgang Bilsky との共同研究をとおして作成されたものであり、Schwartz et al. モデル（2012）は、それがヨーロッパ社会調査学会（European Survey Research Association: ESRA）の会長である Eldad Davidov らとの共同研究をとおして改訂されたものである。つまり、前者のモデルは、価値観をめぐる Schwartz の理論的なアイデアと Guttman の流れをくむ Bilsky の「ファセット・アプローチ」の方法論的なアイデアとの出逢いのもたらした産物ともいえるものであり、後者は、さらにそこに Davidov らのこの領域におけるもう一つの方法論的な先端にある「確証的因子分析（Confirmatory Factor Analysis: CFA）」が加えられることによって生み出された作品といえるものである。

思うに、実証科学の領域におけるブレイク・スルーは「substantive なアイデア」と「methodological なアイデア」の出逢いをとおして達成されるもののようなのである。

因みに、このような出逢いがもたらした社会科学の領域における偉業の一つとして、Elihu Katz の「マス・コミュニケーション研究」がある。Katz は、その生涯をとおしてこの研究領域において、二度にわたるブレイク・スルーを成しとげた。その一つは「コミュニケーションの二段階の流れ」の研究であり（Katz and Lazarsfeld 1955）、もう一つは「利用と満足」の研究である（Katz and Gurevitch 1976）。そして、このような研究が、この領域におけるブレイク・スルーと呼べるものとなったのは、それらが、前者については、数理社会学の祖ともいべき Paul F. Lazarsfeld との共同研究、そして後者については、社会測定法の巨人ともいべき Guttman との共同研究をとおして、「substantive なアイデア」が「methodological なアイデア」によって実証科学に裏づけられたからにほかならない。

確かに、Schwartz の「環状連続体モデル」（図 6）から「三次元のヒエラル

ヒカルな構造モデル」(図8)への発展も、「価値観」の研究領域における二段階のブレーク・スルーともいうべきものであり、それは Elisha Katz の研究事例に匹敵する快挙であるといわなければならない。Schwartz の研究が、世界のアカデミック・コミュニティにおいて、広く注目を集めている所以である。

しかし、それにもかかわらず、筆者の問題関心と リサーチ・クエスチョンの視座からするならば、そこに問題なしとしない。それは以下の点である。

① Schwartz (1992) の「価値観モデル」は、価値観の諸項目が、一つの円を10の扇形(あるいはくさび形)に区分するモデルであった。Guttman の「ファセット・セオリー」からするならば、このような形状は、分析に取りあげた諸項目が「ランク・オーダー」を持たない変数である場合に SSA マップに描き出される形状である。

ところが、筆者の問題関心は、人びとの価値観の、一方の「一般的・抽象的な側面」と他方の「個別的・具体的な側面」という「ランク・オーダー」が設定される諸変数にある。そこで、筆者の問題関心とそこから導かれるリサーチ・クエスチョンにアプローチするためには、Schwartz の用語でいうところの「環状連続体」——Guttman の用語でいえば「Circumplex」——というモデルの「構造」そのものを変更する必要にせまられる。

② Schwartz et al. (2012) のモデルでは、従来の円形の外側にもう一つの同心円が描き加えられ、そこに、その内側の同心円内に位置する諸項目とくらべて、より「一般的・抽象的な価値観」を表現する用語が書き入れられた。いうまでもなく、それは、価値観の諸項目をグループ化するより高次の価値観の存在が、「確証的因子分析」をとおして確認されたからにほかならない。

ここでの問題は、従来の円形の外側にもう一つの同心円を描き、そこに「一般的・抽象的な価値観」を表現する用語を書き入れるという「モデル」の図式化の仕方をめぐって提起される。それが、単に「モデル」の図形的な表現であるとする限りにおいて、そこには何の問題もないとされるかもしれない。しか

し、より厳密にいうならば、その同心円の内側の部分は、SSA マップから、「ファセット・セオリー」の「経験的な法則 (empirical law)」を踏まえて作成された——「ファセット・アプローチ」の用語でいえば、SSA マップにおける価値観の諸項目の「空間布置」が、この図のような「空間分割」に仕上げられた——ものである。ところが、同じ同心円の外側の部分は、「確証的因子分析」をとおしてその存在が確認されたより高次の価値観の次元を、同じく同心円という図形的な表現で付加的に描き足したものである。このように、まったく性格の異なる二つの統計技法による分析結果を一つの図形的な表現のなかに合体させたことによって、その付加的な部分が SSA マップの延長線上にあるかのような誤解を誘発することになる。これは重大な問題といわなければならない。それは、もはや特定の「モデル」の図形的な表現の問題というレベルを大きく越えることになる。

なぜならば、「ファセット・セオリー」の「経験的な法則」からするならば、SSA マップの「空間分割」の結果は、上述のような同心円の表示の仕方とはまったく逆の方向となるからである。具体的にいうならば、SSA マップにおいては、外側の同心円のところには、人びとの価値観のより「個別性・具体性」の高い諸項目が、そして内側の同心円のところには、より「一般性・抽象性」の高い諸項目が位置することになるからである。

Schwartz et al. (2012) モデルは、従来の価値観の諸項目に、より一般性・抽象性の高い、高次の価値観のレベルを設定することで、「価値観研究」に「ランク・オーダー」のアイデアを導入したといえることができる。そして、まさにその点において、それは筆者の「価値観研究」の視座と共通する部分を持っている。しかし、「ランク・オーダー」の設定という点では共通するものの、その問題関心の方向はまったく逆である。つまり、Schwartz (1992) は、やや一般性・抽象性の高い、いわゆる “Basic Human Values” に関心を示したが、それが Schwartz et al. (2012) に到って、さらに「一般性・抽象性」の高い次元の抽出に向かっていくことになったのである。

## 7. Circumplex モデルから Radex モデルへ

筆者の「社会学的イマジネーション」にもとづく「リサーチ・クエスチョン」にアプローチするための道具立て（「枠組み」）として、Schwartz の「環状連続体モデル」は十分でないということが明らかとなった。より正確にいうならば、現代における人びとの価値観の諸相の記述・測定・分析とそれにもとづく諸知見の理論化のためには、Schwartz によって提案されたような「構造モデル」の準備が有効な出発点となる。その意味で、Schwartz の「価値観モデル」のアイディアはきわめて示唆的なものである。しかし、それにもかかわらず、筆者の社会的な問題の立て方——Schwartz の関心が「社会的なコンテクストにおける人間の価値観のあり様」というところにあるのに対して、筆者のそれは「人びとの価値観のあり様をとおして社会の姿を描き出す」ことにある——からするならば、Schwartz の質問諸項目と「Circumplex モデル」の利用は決して適切な道具立てとはならない。

こうして、筆者は、Schwartz の「価値観研究」に、つぎの二つの修正を加える試みを提案する。

① Schwartz のより「一般性・抽象性」の高い価値観の諸項目に、より「個性・具体性」の高い価値観の諸項目を加えて、「質問紙（調査票）」を再構成する。

② 調査結果のデータ分析の「枠組み」となる「価値観の構造モデル」としては、「Circumplex モデル」に代わって、「Radex モデル」を採用する。

さて、ここで提案する「Radex モデル」は、Guttman の「ファセット・セオリー」を構成する「第二の法則」の一つである。その基本的な考え方については、すでに Guttman の「ファセット・セオリー」の解説のところで、その要点を記した。では、このような「Radex モデル」は、筆者の立てた「リサーチ・クエスチョン」に対して、どのようにこたえることができるであろうか。それは、つぎのようなデータ分析の結果を予測することができるという点にまとめられる。具体的にいうならば、Schwartz のやや「一般性・抽象性」の高い価値観の諸項目に、

筆者の問題関心から作成されるより「個性・具体性」の高い価値観の諸項目を加えて「質問紙（調査票）」を再構成し、それを用いてなされる実査の結果を、SSA マップにプロットするならば、Radex の形状が描き出されることになるということである。つまり、従来の Schwartz の諸項目が内側の同心円内に、そして筆者の諸項目が外側の同心円内に、それぞれ位置するとともに、いずれの諸項目も、それぞれの同心円内に置いて、それぞれの内容の諸領域に区分される扇形（あるいはくさび形）内に位置することになる。そして、そのような諸項目の布置の基本的なパターンについては、調査対象国ごとに「類似性」が見られるものの、「内側の同心円内の諸項目」と「外側の同心円内の諸項目」との SSA マップ上での距離も含めて、それぞれの諸項目の位置関係の諸相においては、必ずや国ごとに「差異性」が見られることになるであろうということである。このような国ごとの「差異性」こそが、筆者の問題関心、そして「リサーチ・クエスション」の中心にある。そして、このような価値観研究を、筆者は「人びとの価値観をととして社会を見る」アプローチと呼んでいるのである。

こうして、価値観研究の新しい展開は、このような価値観諸項目の Radex の形状の空間布置の諸相を詳細に「記述」することから始めることになる。そして、その上で研究は、そのような「記述」の意味の読み取り、つまりその「説明」へと着実に進んでいくことになるのである。

## 参考文献

- 真鍋一史 (1998) 「価値観の研究の視座——その測定の方法とリアリティをめぐる——」  
田中宏・大石裕編『政治社会理論のフロンティア』慶應義塾大学出版会、191-215 頁。  
真鍋一史 (2012) 「東アジアにおける宗教意識と伝統的な価値観——国際比較調査のデータ分析——」『青山総合文化政策学』(5) 325-346 頁。  
真鍋一史 (2013) 「価値観の研究の視座——経緯・課題・展望——」『法学研究』（慶應義塾大学法学研究会）86 (7) , 440-454 頁。  
真鍋一史 (2016) 「ファセット・アプローチと価値観研究——Louis Guttman とその共同研究者の知的世界の探索——」『関西学院大学社会学部紀要』123,

Inglehart, Ronald (1997) *Modernization and Postmodernization: Culture, Economic, and Political Change in 43 Societies*, Princeton University Press.

- Inglehart, Ronald and Welzel, Christian (2005) *Modernization, Cultural Change, and Democracy: The Human Development Sequence*, Cambridge University Press.
- Katz, Elihu. & Lazarsfeld, P.F. (1955) *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, The Free Press, New York.
- Katz, Elihu and Gurevitch, Michael (1976) *The Secularization of Leisure: Culture and Communication in Israel*, Faber & Faber.
- Manabe, Kazufumi (2002) Japanese Values Orientations from a Comparative Perspective: Inconsistent, Discrepant and Pluralistic Patterns, in A. Klein, R. Lützel and H. D. Ölschleger eds. *Modernization in Progress*, Bier'sche Verlagsanstalt, (Bonn, Germany), pp.239-255.
- Schwartz, Shalom H. and Bilsky, Wolfgang (1987) Toward A Universal Psychological Structure of Human Values, *Journal of Personality and Social Psychology*, 53 (3), pp.550-562.
- Schwartz, Shalom H. (1992) Universal in the Content and Structure of Values: Theory and Empirical Tests in 20 Countries, in M. Zanna ed., *Advance in Experimental Social Psychology*, 25, Academic Press, pp.1-65.
- Schwartz, Shalom H. et al. (2012). Refining the Theory of Basic Individual Values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103 (4), pp.663-688.

## 付記

本稿は、2015年7月13日(月)～17日(金)、アイスランド大学(アイスランド・レイキャヴィック)において開催された European Survey Research Association (ESRA) の第6回大会における筆者の発表論文に加筆して作成されたものである。